カムチベット語維西 [Melung] 方言の r 化母音とその来歴

鈴木博之　　ツェリ・ツォモ

1　はじめに

カムチベット語維西 [Melung] 方言は、雲南省迪慶藏族自治州維西傈僳族自治県南部に位置する塔城郷を中心とし、同地域に隣接する県城保和鎮、永春郷で用いられる一連の方言群のうち、保和鎮および永春郷で用いられる方言をさす。

この方言には他のチベット語方言ではおそらく報告されたことのない r 化母音が複数の語に現れることが、筆者の現地調査で判明した。本稿では、特にこの要素について具体的な例語を挙げつつその来歴について初歩的な考察を行う。

1.1　迪慶州のチベット語方言概況

具体的な議論に先立って、Melung 方言のチベット語方言上の位置づけについて述べる。

雲南省迪慶州のチベット語は、瞿靄堂・金效静 (1981) などいくつかの先行研究では、カムチベット語の下位区分において独立して考えられている。ところが迪慶州のチベット語は、母語話者の意識にもあるように、さらに３つの互いに通じ合いにくい方言群から成り立っていると考えられる[1]。

1. Sems-kyi-nyila（香格里拉）方言群
   rGyalthang（建塘）方言など香格里拉県に分布

2. nJol（徳欽）方言群
   nJol 方言など、主に徳欽県中西部・維西県瀾滄江流域に分布

3. Melung（塔城）方言群
   Melung 方言など、主に維西県南部に分布

[1]以下の３種は代表的なもので、迪慶州周縁部には異なる方言群に属するものが分布していることに注意しなければならない。詳細は鈴木 (2006) を参照。

金沙江をはさんで対岸となる四川省側のチベット語方言との関係など、より広域で考える方言の特徴と分布の詳細は複雑であり、稿を改め論じる必要がある。

《維西傈僳族自治県誌》(1999) などによると、維西県でチベット族が集住する地域は県北部と県南東部の２地点に分かれている。また、維西県全体でチベット族、納西族、傈僳族、漢族、白族など複数の民族が雑居している[2]ため、言語状況は極めて複雑であり、各郷の中心部では漢化が急速に進んでいる[3]。また、チベット語母語話者の意見によると、この両地点で用いられる言語は互いに通じ合わず、Melung 方言群が特殊で他地域の方言と通じないものであると認識されている[4]。

なお、本稿で扱う保和鎮および永春郷で用いられるチベット語は話者数が少なく、その話者についても十分な会話力が伴う人の割合が極めて低い。そもそも居住するチベット族の絶対数が少ない上、すでに漢化がかなりの程度進行していることが原因として挙げられる。

1.2　先行研究

方言の下位区分に関する先行研究はいくつかある。格桑居冕・格桑央京 (2002) は「南路次方言」に分類しているが、これは単に地理的観点によるものである。より細かな区分を提示するものとして、瞿靄堂・金效静 (1981) では「南路次方言」から四川省甘孜藏族自治州郷城県のチベット語、雲南省のチベット語をそれぞれ独立させている。陸紹尊 (1992) などは雲南省のチベット語を代表する方言に rGyalthang 方言をあげ、nJol 方言群、Melung 方言群との区別はない。先述の３種の方言群を区別しようという考えはおそらく少数派である[5]。

一方、記述研究は Sems-kyi-nyila 方言群の rGyalthang 方言について複数行われている（金鵬　主編 (1983)、Hongladarom (1996) や《雲南省誌》(1998) など）。nJol 方言群や Melung 方言群も過去に調査は行われたであろうと推測する[6]が、まとまった形で発表されたものは未見である。それゆえに、本稿で扱う Melung 方言についての具体的記述は参照できず、また上述の３方言群間の共通点と相違点を把握することもできない。先の調査で本稿で扱う r 化母音が記録されたかどうかも不明である。

---

[2]ただし実際は各民族ごとに分かれて居住地を形成している場合が多い。

[3]漢族が多く定住する以前は、郷の中心部で暮らす人々の中には複数の少数言語を操る人も多くいたというが、今は漢語が共通語としての機能を持つようになってきている。

[4]Melung 方言の名称は維西のチベット語名*’Ba’-lung* による。同県のもう一方のチベット語方言は、用いられる郷の名称から Budy（巴迪）方言と呼ぶ。ただし、維西のことを口語形式で/ˊm(b)e: lõ/と呼ぶのは Budy 方言で、Melung 方言では/ˊn̥i nɑʔ/と呼ぶ。

[5]閔江海主編 (2001:27) はカムチベット語の下位方言区分としては「南路次方言」としているが、迪慶州の方言区分に関して大きく香格里拉（原文は中甸）、徳欽、維西、東旺の４つに分けられると述べ、他の文献に比べて詳細な意見が提示されている。

[6]その根拠の１つに、Zhang (1996) に方言名と方言区分が記載されているものがある。

1.3　本稿で用いる言語資料

本稿で用いる Melung 方言の言語資料は、筆者の現地調査で得られたものである。主な調査協力者はソナン・ツェリ [bSod-nams Tshe-ring] さん（男性）で、調査は 2007 年３月維西県永春郷で行った。主に議論の対象とするのは語の引用形式で、文中に現れる形式は必要な場合を除き触れない。また、本稿で対照するその他の言語および方言は、出典を明記しない限りすべて筆者の現地調査によって得たものを用いる。

2　r 化母音を含む具体例

チベット語の各種方言において、r 化母音が記述されることはまれである。母音＋末子音（韻母）の形式を包括的に扱う瞿靄堂 (1991) にも記述がない。その中で Melung 方言では、音素として分析できる r 化母音が以下のような語に現れる。

¯pɚ「雲」	´ɚr tʰuː「骨」
ˆmɚ lowʔ「雷」	ˆbɚ nɑʔ「ハエ」
´ɚ「山」	¯ⁿbɚŋ「砂糖」
´ɚr la「尾根」	ˆɦɛːr「布」
´ɚr ᵑ̊kʰoŋ ¯tɑŋ「洞窟」	´kɚ ʈʂʰɑŋ / ´kɚ「ナイフ」
´ɚr ʂʰoŋ「谷」	´mɚʔ「龍」

以上に示すように、r 化母音は特に/ɚ/という中舌母音/ə/が r 化している例が目立つ。Melung 方言の母音は/i, e, ɛ, a, ɑ, ɔ, o, u, ɯ, ə, ʉ, ɵ/があるが、調査した範囲内ではこれら全ての母音が対応する r 化音が確認されるわけではなく、/ɛɚ, ɔɚ, ɚ/に限って見られる[7]。

r 化母音の音声学的特徴は母音調音時における継続的なそり舌性を帯びたもので、１音節語において入りわたりや出わたりに接近性の極めて高いすなわち子音的なそり舌音の音色は伴わない。しかし後続音節の存在する複音節語では、上記「谷」「骨」の例のように、子音としての r 音[8]が明確に発音されるものがある。

---

[7]中舌母音/ə/について見ると、通常母音/ə/、鼻母音/ə̃/、r 化母音/ɚ/が対立していると考えられる。さらに通常母音と鼻母音については長短の対立もある。

	通常母音	鼻母音	r 化母音
短母音	´mə tɕiː	´mə̃	´mɚʔ
	「あご」	「人」	「龍」
長母音	¯ʈu jəː	¯xʰə̃ː	
	「ロバ」	「靴」	

[8]音声学的には１通りに定まらず、後部歯茎接近音やそり舌接近音などで現れる。

3　r 化母音の来歴

ここでは、r 化母音をもつ語をチベット文語形式（蔵文）と対照することから、その来歴について考察する。蔵文は古期のチベット語の発音をかなりの程度反映しているとされ、蔵文と口語形式を比較する作業によって音変化を確認することができる。

前節に挙げた例とその蔵文形式を比べてみると、r 化母音をもつ例は大きく２つの蔵文に対応する。１つは基字が r のもので、もう１つは足字 r を伴っているものである。以下、この２点に分けて詳しく見ていく。

3.1　基字 r

蔵文基字 r は多くの方言形式が示すように、音節初頭を占める子音（多く/r/）として実現される音に対応する。基字 r に対応する形式には、r 化母音をもつ語ともたない語がある。各例は Melung 方言、語義、蔵文の順で提示する。

1. r 化母音をもつ語

    ´ɚ˞「山」*ri*
    ´ɚ˞r ʂʰoŋ「谷」*ri ?* [第２音節の対応蔵文は不明]
    ´ɚ˞r la「尾根」*ri la*
    ´ɚ˞r tʰuː「骨」*rus ?* [第２音節の対応蔵文は不明]
    ˆɦɛ˞ː「布」*ras*

2. r 化母音をもたない語

    ˆroʔ「友人」*rogs*
    ´ra「山羊」*ra*
    ˆɦa rɑʔ「酒」*a rag*
    ´tə raŋ 「今日」*de ring*
    ´rwɑŋ「自分」*rang*

以上の例を見ていると、r 化母音の有無はおおよそ基字 r をもつ語の母音の質によると判断される。r 化母音をもっているのは蔵文で高母音となるもので、「布」は例外的対応に見える。逆に「今日」は蔵文で高母音をもっているが r 化母音に対応しないのは、そもそもの口語形式が蔵文と一致せず低母音であった可能性[9]や、第２音節という環境、末子音に鼻音があることなどを考慮する必要があるかもしれない。

[9]ただし近隣の方言の「今日」の形式は Budy 方言˥ʔa rĩ、Nyishe（尼西）方言´tə rə̃j、rGyalthang（香格里拉）方言´ʔa rĩというように第２音節に高母音をもっている。

3.2　足字 r

蔵文足字 r は常に基字と組み合わされて用いられ、基字対応音に後続する r 音として理解される。蔵文で足字 r と組み合わさる基字には制限があって、サンスクリット音写用のつづりを除外すると、kr, khr, gr, tr, dr, pr, phr, br, mr, sr, hr およびそれに頭字、前接字（基字に先行する子音要素）を伴う形式がある。

蔵文足字 r の対応形式として r 化母音をもつ語は存在するが、蔵文形式を中心に考えた場合、r 化母音をもたない例も多い。

1. r 化母音をもつ語

    ¯pɚ「雲」*sprin*
    ˆmɔ˞ lowʔ「雷」*’brug ?* [10]
    ˆbə˞ nɑʔ「ハエ」*sbrang nag*
    ¯ɦbə˞ŋ「砂糖」*sbrang*
    ´kə˞ ʈʂʰɑŋ / ´kə˞「ナイフ」*gri chung / gri*
    ´mə˞ʔ「龍」*’brug*

2. r 化母音をもたない語

    (a) 足字 r 対応音が確認されないもの

        ˆpaʔ「がけ」*brag*
        ¯ʰka「髪」*skra*
        ˋʰsoʔ「命」*srog*
        ¯kʰa「鷹」*khra*
        ¯ɦbʉː「蛇」*sbrul*
        ¯pʉ「猿」*spre’u*
        ˆʰsã ma「大豆」*sran ma*
        ˆpʰa nã「細い」*phra bo*

    (b) そり舌音に対応するもの

        ¯ʰʈʂwɑŋ joŋ 「こじき」*sprang po*
        ´ʈuː「ラバ」*drel*
        ´ʰʈə ma「米」*’bras*
        ˋʈɔʔ「６」*drug*

[10]第２音節の蔵文は不明であるが、Nyishe 方言´ȵoʔ ɦluʔ「雷」の第２音節と共通すると考えられる。

(c) 前部硬口蓋破擦音に対応するもの

`tɕʰɑʔ「血」*khrag*

(d) わたり音 r が確認されるもの

¯ᵐbrɯ tswa「稲」*’bru rtswa*

以上の例を見ると、r 化母音は特に˞にかたよって現れているといえ、それは蔵文の母音の質に対応するのではなく口語形式に対応すると考えられる。たとえば¯ⁿbə˞ŋ「砂糖」*sbrang* と¯ʰʈʂwɑŋ joŋ「こじき」*sprang po* は蔵文上同一のつづり字成分（s-両唇音字-rang）をもっているが、口語形式では前者の母音がəで後者は ɑ となり[11]、前者は r 化母音となっている。

2(b) のように蔵文足字 r が基字とともにそり舌音を形成するのは、大部分のチベット語の方言で共通に見られる現象であるが、基字が d の場合はほぼそり舌音となっている。2(d)「米、穀物」の意である*’bras* もしくは*’bru* は、以上に示した例の中で今なお蔵文の示すように口語形式にわたり音 r が維持されているただ１つの例であることから、例外的対応と認められる[12]。2(c) の`tɕʰɑʔ「血」のように蔵文足字 r が基字とともに前部硬口蓋破擦音を形成するのは広くアムドチベット語に見られるほか、rGyalthang（香格里拉）方言や Toding（拖頂）方言でも確認される。Melung 方言では「血」の１例のみが確認されたため、借用が疑われる。

Melung 方言で注目すべきは、2(a) の r 化母音をもつ例と同じ程度に蔵文足字 r が脱落したと分析できる例が確認されることである。たとえばˆpaʔ「がけ」*brag* のようになっている。この現象は Lhasa 方言の一部の語にも見られる[13]。以上に示した Melung 方言の例のうち、`ʰsoʔ「命」*srog* などの蔵文 sr 対応形式にそり舌音が現れない方言は点在する[14]が、それ以外の組み合わせで蔵文足字 r が脱落したとされる例をもつ方言は少ない。このタイプの例については、母音に/ə/をもつ語は存在しない。このため、r 化母音は母音の調音点と密接に関わっているということがいえる。

Melung 方言における蔵文足字 r を含む対応形式を見ていると、基本的に蔵文足字 r に対応するとされる r 音自体の調音運動もしくは発音が極めて弱いものであったと推測できる。このことは基字 r の語に対応する口語形式にも r 化母音が現れている

[11]蔵文-ang 対応形式には複数見られ、ɑŋ / wɑŋ / əŋ などがある。

[12]蔵文足字 r をめぐる口語形式の対応については、甘孜州丹巴県の sProsnang（中路）方言を例に鈴木 (2007) が詳しく述べている。この方言は、多くの例にわたり音 r が維持されている、極めて珍しいものである。

[13]たとえば¯piɦu「猿」*spre’u*、¯pʰa po「細い」*phra bo*、´ᵐbi「めすヤク」*’bri*、`soʔ「命」*srog* などのような例がある。基字が p, ph, b, s である特定の語に現れる。

[14]たとえば「命」の例では、郷城県の gDongsum（洞松）方言で`ʰsoʔ、康定県の Rangakha（新都橋）方言で¯sɑとなっている。

点からも理解できる。そして、蔵文足字 r 対応音が基字対応音とともにそり舌音を形成するというチベット語方言に極めて広く見られる音変化をすべての例がたどることなく、以上の例から推測するに、口語形式の母音が [ə] もしくはそれに近い音をもっていた場合に母音を r 化し、そうでない場合は脱落する傾向にあった。そして基字に対応する初頭子音の調音点を変えるという広くチベット語方言に見られる現象に対応する例について、本来語ではなく借用語と分析しえる可能性もある。このことは、今後周辺の方言群も視野に入れて検証の必要がある問題であり[15]、本稿では Melung 方言の言語事実に基づいた推測を述べるにとどめる。

3.3　まとめ

以上に見たように、Melung 方言の r 化母音はかなりの程度で蔵文との対応関係があり、いずれも過去には子音の r が関わっていることが判明した。

その中で特筆すべきは、上でも触れていないように、蔵文後置字 r（音節末子音 r に相当）は r 化母音と関わりが見られないことである[16]。基本的に r 化母音は蔵文の初頭子音（群）に含まれる r と対応関係があるということに注意する必要がある。

4　周辺言語の事情

r 化母音をもっていることは、チベット語方言として極めてまれな部類に属するものである。チベット語の１方言がこのような音変化をたどったことについては、他の要因が関わっている可能性も視野に入れて考える必要がある。

実際 Melung 方言の分布地域に近い地域で話されるいくつかの言語を見てみると、納西語（西部方言）にər、白語（南部方言）に eɹ、怒蘇語に ɔɹ, ɔɹ, əɹなどが見られる[17]。これらのような少数言語からの影響を受けていることによって、Melung 方言にも r 化母音が生じたと考えるのも不可能ではない。なお、孫宏開主編 (1991:105-108) に r 化母音の来源に関する記述があるが、それによると納西語や白語などの r 化母音は多くわたり音の位置にある r 音との対応関係が示されており[18]、Melung 方言の例もまた平行的である。

---

[15]Melung 方言群以外では、近隣の方言であっても r 化母音や蔵文足字 r の脱落といった現象は基本的に確認されない。その中でただ１例迪慶州の方言で共通に見られる語が ˊŋgo「行く」*'gro* で、足字 r が脱落したと見られる口語形式がある。

[16]たとえば ˥ʰsʰɛː「金」*gser*、˥ʰtə ˩ˀga「くるみ」*star ga* などのように、r 化母音は現れていない。

[17]これらの例は《雲南省誌》編纂委員會 (1998) による。

[18]蔵文形式ともおそらく語源的に対応関係があると見られる例を孫宏開主編 (1991:105-108) から１例挙げておくと、「書く」（蔵文 *bris*）に対して納西語（西部/麗江方言）pəɹ^{55}、白語（南部/大理方言）veɹ^{53} となっている。

以上のような点から、言語接触も視野に入れて Melung 方言の r 化母音の発生過程を分析する必要性があるといえるだろう。

参考文献

鈴木博之 (2006)《九香線上的藏語方言對比研究》第４届両岸三地藏緬語族語言學學術專題討論會發表論文

—— (2007)「チベット語中路 [sProsnang] 方言の/r/を含む子音連続」『東京大学言語学論集』第 26 号 31-47

Hongladarom, Krisadawan (1996) Rgyalthang Tibetan of Yunnan: a Preliminary Report, in : *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* Vol. 19.2/Fall, 69-92

Zhang, Jichuan (1996) A Sketch of Tibetan Dialectology in China: Classifications of Tibetan dialects, en : *Cahiers de Linguistique - Asie Orientale* 25 (1), 115-133

格桑居冕 [sKal-bzang ’Gyur-med]・格桑央京 [sKal-bzang dByangs-can] (2002)《藏語方言概論》民族出版社

金鵬　主編 (1983)《藏語簡誌》民族出版社

陸紹尊 (1992)〈雲南藏語語音和語匯簡介〉《藏學研究論叢》第４輯 120-131 西藏人民出版社

閔江海主編 (2001)《迪慶藏族自治州民族誌》深圳匯源彩色印刷有限公司

瞿靄堂 (1991)《藏語韻母研究》青海民族出版社

瞿靄堂・金效静 (1981)〈藏語方言的研究方法〉《西南民族學院學報》第３期 76-84

孫宏開主編 (1991)《藏緬語語音和詞匯》中国社會科學出版社

雲南省維西傈僳族自治県誌編纂委員会編 (1999)《維西傈僳族自治県誌》雲南民族出版社

《雲南省誌》編纂委員會 (1998)《雲南省誌　59　少数民族語音文字誌》雲南民族出版社

[付記]

筆者による現地調査については、平成 16-18 年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (S)「チベット文化圏における言語基層の解明」（研究代表者：長野泰彦、課題番号 16102001）の援助を受けている。

ཁམས་རྒྱད་ཀྱི་འབའ་ལུང་ཡུལ་རྒྱད་ནང་ཕྱི་ལྗོངས་
དང་འདི་འདྲུང་ཁུངས།

ཚེ་དབང་འགྱུར་མེད།　　ཚེ་རིང་མཚོ་མོ།

གནད་བསྡུས།

འབའ་ལུང་རྒྱད་འབའ་ལུང་རྫོང་ནང་བཙོ་ཏེ། ཡོང་ཁྲན། ཐ་ཁྲིང་ཕྱུ་བུ་ཐེ་བ་ཙོ་ཙོ་བཤད་དོ། ཡུལ་རྒྱད་འདི་ནང་ལ་ /ɚ/ ཕྱ་བུ་ཕྱི་ཕྲིལ་དབྱངས་ཡོད་དེ་ཐོད་ཡིག་གི་རུ་དང་ར་བཏགས་དང་དོ་མཉམ་པ་ཡོད་དོ།།

/ˊɚ/ (རི་) དང་ /¯pɚ/ (ཁྲིན་) ཕྱ་བུ་ཕྱི་ཕྲིལ་དབྱངས་ཡོད་ལ་ /ˉʰka/ (རྒྱ་) དང་ /ˉʰbɯː/ (ཁྲུལ་) ཕྱ་བུ་ཕྱི་ཕྲིལ་དབྱངས་མེད། རྒྱད་འདི་ནང་དབྱངས་དཀྱིལ་ /ə/ ལ་ཕྱི་ཕྲིལ་དབྱངས་མང་ཤོས་ཡོད་དོ།།

Voyelle r-colorée et son origine en khams-tibétain le dialecte de Melung [Weixi]

Hiroyuki SUZUKI　　Tshering mTshomo

sommaire

Le dialecte de Melung, khams-tibétain, parlé au sud du district de Weixi, Diqing, Chine, possède la voyelle r-colorée. Cet article indique des exemples avec la voyelle r-colorée, et en contraste avec le tibétain écrit.

L’origine de la voyelle r-colorée est la lettre tibétaine *r* comme une consonne centrale et un glide, et si la qualité de la voyelle est un *schwa* /ə/, elle a tendance à devenir r-colorée.